

夏目漱石『こころ』における先生の自我

高 杉 三千枝

はじめに

明治の時代からおよそ百余年を経た今日までも日本の文豪、夏目漱石の声価は高く不動の地位を築いている。人間の内面心理を鋭く描出していくその筆法からは、あたかも真冬の氷の上を素足で歩くときの、あの肌にくい込むチカチカした感触がよみがえってくるのである。と同時に、いつの世にも通じるさまざまな問題が、機微に移りつつある時代感覚のもとに、ある時は滑稽さや皮肉をまじえて、またある時は重々しく深刻にと筆先のタッチの妙味にあやつられ、私達の胸にたたみこまれてくるのである。

原子力文明による機械化のこの世の中にあつて静かに自らを省みる余裕を失いつつある我々に「深く考えること」を教えてくれる漱石の作品は、人間の成長と共に生き続けているといえよう。

なかでも中学生のころ読んだ『こころ』は私の読書歴史中、最も感銘を与えられた書として強い印象を持っていた。というのも、「生きる」力の旺盛な時期に誰しもが避けることのできない「死」、ことに「自殺」という問題にこの書を通して遭遇したためと思われる。

そしてその時「こころの成長を待って是非もう一度読んでみたい」と思ったものだった。

さて改めて読みかえしてみても私は次のような感をいだいた。

人のゆくところ、それぞれに道があるが、それらは意外にも幼き日の個人的な体験に起因することが多いのではなからうか……まさくに『三ツ子の魂百まで』である。

本論では、そうした「先生」の過去の体験に基づいて、先生にみる自愛意識の観点から細かく二つの出来事、仮にこれらを(一)と(二)とするならば(一)面、裏切られたこと——叔父との関係において、(二)面、裏切ったこと——お嬢さんを取り巻くKとの関係においてという二面から、『こころ』における「先生」の自我(一)、(二)と題して筆を運んでいきたいと思う。

(一)

まず、問題となるのは「先生」にみられる自愛意識の強さである。それも、元はといえば二つの大きな出来事、すなわち叔父に財産を誤魔化されたことと、Kの自殺とによっている。しかし、「先生」自身の性格的なものが内在していて、それが此等の事件を通して、より表面化してきたといった方が妥当かも知れない。ともあれ、ここでは「先生」の最初の経験——叔父に裏切られたことからみていくことにしよう。

「先生」がまだ二十歳にならない時分に両親は亡くなった。一人残された「先生」は、叔父のもとに引き取られ、「先生」の希望で

東京に出て高等学校に入れてもらった。田舎に住む叔父は「先生」の父の弟であり、事業家でなかなかの闊達者であった。こういう叔父を「先生」は誇りに思い、また叔父の方でも彼によくしているかのようであった。ところが「先生」が休みで帰郷する度に叔父は彼に結婚を勧めようになり、二度目に故郷に帰った時、「先生」の従妹即ち叔父の娘を貰ってくれと言ひ出した。その氣のない「先生」は結婚の申し出をはっきり拒絶してしまう。断わってしまえばそれで済んだものと思つていた「先生」は、何度目かに帰国した時に、叔父達の態度が以前とは全く異なっている点に氣がつく。そしてそこに以外な事がもたらされたのである。叔父は財産目当てに自分の娘と「先生」を結びつけようとしたが、断わられたために残された財産を誤魔化していたのである。それまで鷹揚に社会の穢れを知らずに育つてきた「先生」にとつて、叔父の行為は相当打撃を与えただちがいない。このことについて「先生」は次のように語る。

「私は他に欺ひとむかれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺むかれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄背負はされてゐる。恐らく死ぬ迄背負はされ通しでせう。(中略)然し私はまだ復讐をせずにゐる。……私は彼等を憎む許ぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覺えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」(上・三十)

これほどの強い言葉を「先生」にはかせた出来事は、彫刻師が像を刻み込んでいくように深い傷を「先生」に負わせたのだ。それまでの「先生」の生立ちが順境であつただけに、この事は耐えられな

い侮辱であり、一生涯かかっても拭い去れない事実として「先生」の運命にのし掛かつていたのである。この青年期に受けた個人的な体験は「先生」のみが背負つていくにはあまりに重荷であつたが、両親が早く亡くなつて誰にも頼れず、また打ち明ける人もないままに自分の胸にそつと仕舞い込んで長い間放出することが成されなかつた。いくら、「物を解きほゞいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖」(下・三)が性分として備わつていたにせよ、この経験が後々まで「先生」の運命に尾を引く一因となつたと考へて差支えないことと思われる。

身内の者で、信じていた叔父が、自分を欺いたという怒りに燃える事実が、「先生」に「平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間に、急に悪人になるんだから恐ろしい」(上・二十八)との認識を与えた。まさにこれは「先生」の生きた言葉である。人間には初めから善玉、悪玉があるのでなく、ある瞬間に、ふとしたことから百八十度の轉換が可能なる存在であるという判然とした事実が、叔父の件を例として、「先生」の胸にしっかりと畳み込まれたのである。そして「是から先何んな事があつても、人には欺まされまい」(下・十六)という覚悟をしたのである。このように叔父の、ひどい仕業によつて、人間不信の感を強くした「先生」は、この件以来、自己保守——自愛意識の姿勢を明らかにしていくのである。

ただ、ここで前に少し触れたように「先生」の性分——(疑)懷疑性情がその根底に横たわつていたことは事実であろう。何故なら、「先生」が三度目に帰国したときにその性分が現れているのである。少しその部分を引用してみよう。

々帰つて見ると叔父の態度が違つてゐます。元のやうに好い顔をして私を自分の懐に抱かうとしません。それでも鷹揚に育つた私は、帰つて四五日の間は気が付かずにおりました。たゞ何かの機会に不図變に思ひ出したのです。すると妙なのは、叔父ばかりではないのです。叔母も妙なのです。従妹も妙なのです。中学校を出て、是から東京の高等商業へ這入る積だといつて、手紙で其様子を聞き合せたりした叔父の男の子迄妙なのです。

私の性分として考へずにはゐられなくなりました。(傍点筆者)
(下・七)

と「先生」は述べている。

あれこれと思いをめぐらす、この性分は、「先生」を知つていく上で必要欠く可からざることと思われる。というのも「此性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後來益他ますくひとの徳義心を疑ふやうになつたのだらうと思ふのです。それが私の煩悶や苦惱に向つて、積極的に大きな力を添へてゐるのは慥ですから覚えてゐて下さい。」と「先生」が遺書中で前置きしていることによる。

以上のように迎つてくると、「先生」の自愛意識とは、もともとこの性分すなわち懷疑性情から端を發しているものと考えられる。

註1 吉田精一「夏目漱石必携」学燈社 昭和42・4・20

(二)

第一節にひき続いて、ここではお嬢さんをめぐる「先生」とKとの恋愛感情、ひいてはこの論のテーマでもある「先生」にみる自愛意識へと問題を繰広げていきたいと思う。

まず初めに「先生」とお嬢さんとに焦点をあてて考へてみることにする。

「先生」がまだ大学生であつた頃、下宿先がこのお嬢さんのいる家であつた。それまで女性というものを見縊つていた「先生」が、このお嬢さんに対してだけはそうではなかつた。「先生」の語るるところによると、

私は其人に対して、殆んど信仰に近い愛を有つてゐたのです。私が宗教だけに用ひる此言葉を、若い女に應用するのを見て、貴方は愛に思ふかも知れませんが、私は今でも固く信じてゐるのです。本當の愛は宗教心とさう違つたものでないといふ事を固く信じてゐるのです。私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるやうな心持がしました。御嬢さんの事を考へると、気高い気分がすぐ自分に乗り移つて来るやうに思ひました。もし愛といふ不思議なものに両端があつて、其高い端には神聖な感じが働いて、低い端には性慾が動いてゐるとすれば、私の愛はたしかに其高い極點を捕まへたものです。私はもとより人間として肉を離れる事の出来ないからだ身体でした。けれども御嬢さんを見る私の眼や、御嬢さんを考へる私の心は、全く肉の臭を帯びてゐませんでした。(下・十四)

叔父の財産横領に出合い、人間というものを全く信じることの出

来なくなつた「先生」にとつて、凍りついた人間関係のうちで、かすかな光明を見出したのが、このお嬢さんに対してであつた。そしてそれは日々恋愛感情へと募つていった。人間不信に陥つてゐる「先生」にとつて、このことは一種の矛盾と感ぜられるが、若い「先生」にはそれは全く自然であつた。もつといへば「生命燃焼」が「先生」を駆立てたともいえる。このことは、「誰が出て来てても説明は出来ない。唯それが事実であると認めるより他に道はない」(漱石「文芸の哲学的基礎」)ことなのである。

一方では、お嬢さんに対して強い愛情を感じながらも他方では、「先生」の内部に潜む鬱々たる懐疑性が、ある一線を境として踏み越えられない四面の壁をつくつていた。それは、まるで檻に閉じ込められた獣と等しく、そこから脱出する手段をも意欲をも、ましてや実行にも移さないまま日が過ぎていった。

その疑惑とは、奥さんが叔父と同じような意味で、娘を自分に接近させるのではないかなど、経済上の利害関係をめぐつて「先生」の胸の中に渦巻いてくるのであつた。その頃の気持を「先生」は次のように評している。

「私は又警戒を加へました。けれども娘に対して前云つた位の強い愛をもつてゐる私が、其母に対していくら警戒を加へたつて何になるでせう。私は一人で自分を嘲笑しました。馬鹿だなといつて、自分を罵つた事もあります。然しそれだけの矛盾ならいくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだのです。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事を遣つてゐるのだらうと思ふと、私は急に苦しくつて堪らなくなるのです。不愉快なのではありません、絶体絶命のやうな行き詰つた心持になるのです。それでゐて私は、一方に御

嬢さんを固く信じて疑はなかつたのです。だから私は信念と迷ひの途中に立つて、少しも動く事が出来なくなつて仕舞ひました。私には何方も想像であり、又何方も真実であつたのです。(下・十五)

ここに於て、再び「先生」の性分プラス叔父に欺かれた記憶がまざまざと蘇つてきて、「先生」を悩ませ、一步の前進をも阻むのであつた。このように、何かに当面するたびに逡巡するようになった「先生」は、新しく突き進んでいくことを恐れて、現状のままで平静を装つていく仮面的人間へと沈んでいくのである。そこには、過去に執着する消極的な進歩のない姿がみられる。

一見平穩にみえるなかに、いつも研澄まされた神経を働かせてゐる「先生」の前に、大きな嵐をもたらせる者としてKの登場が重要な意味をもつてくる。

これより先、「先生」の決定的な運命の要となるKを新しく加えて展開されるお嬢さん獲得の争いを通して、「先生」の自愛意識を掘り下げていきたいと思う。

Kが「先生」と同じ下宿に住むまでの経緯を簡単に紹介しておこう。

「先生」と同郷で小供の頃から仲好であつたKは、真宗寺に生まれ、医者の子となつたが、宗教や哲学を好み、無断で大学の文科に入った為、それがわかり養家の感情を害し実家からは勘当される。その後の彼は「道」のための「精進」(下・十九)に励み意志の強い人間となることを目指すが、神経衰弱に陥つてしまふ。

このようなKへの同情から「先生」は彼を自分の下宿へ連れ込むわけであるが、結果的にはそれは思わぬ不幸を招くことになるのである。

その下宿に移って以来、若いKの心も以前の「先生」と同じように、春がやって来て厚く張った氷塊がだんだん融けていくように、しだいに和んで人間性を取り戻してくる。奥さんやお嬢さんに暖かくされるKに、そのように依頼した「先生」の青春の吹雪が、初めの「同情」から「嫉妬」へと舞い始める。ここでも「先生」の懷疑とあせりが頭を擡げてくるのである。その気持を「先生」は遺書の中で次のように告白している。

〃私はそれ迄躊躇してゐた自分の心を、一思ひに相手の胸へ擲き付けやうかと考へ出しました。(下・三十四)

「先生」がお嬢さんに対して、機会を伺いつつも、思い止つていたものがKの手に渡りそうになった時、始めて「先生」は心中を揺り動かされ、実行(奥さんにお嬢さんを要求すること)の一步手前にいたといえよう。

しかし、またしてもここで「先生」の自尊心——自愛が決心を鈍らせるのである。

〃Kの来ないうちは、他の手に乗るのが厭だといふ我慢が私を抑え付けて、一步も動けないやうにしてゐました。Kの来た後は、もしかすると御嬢さんがKの方に意があるのではなからうかといふ疑念が絶えず私を制するやうになつたのです。(下・三十四)

とあるように「先生」はいつでも人の気持を先回りして考えてみてからでない、実行に移せない質の人である。そしてその奥には妙に取澄ました高踏的な態度がうかがわれるのである。「先生」のそんな態度が如実にあらわれている箇所を引用してみよう。

〃此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。世の中では否応なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがつてゐる人もありま

すが、それは私達より余つ程世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよく呑み込めない鈍物のする事と、当時の私は考へてゐたのです。一度貰つて仕舞へば何うか斯うか落ち付くものだ位の哲理では、承知する事が出来ない位私は熱してゐました。(下・三十四)

ここからは「先生」も指摘するように「高尚な愛の理論家」「迂遠な愛の実行家」の姿が読み取れる。このように頭の中で一進一退の理論に思い迷っているうちに、重々しいKの口から突然、お嬢さんへの恋慕の情が「先生」に向けてなされた。このことは「先生」にとつて不意打ちを食らわされたも同然であつた。この時の驚きを「先生」は次のように述べる。

〃其時の私は恐ろしさの塊りと云ひませうか、又は苦しみの塊りと云ひませうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のやうに頭から足の先までが急に固くなつたのです。呼吸をする弾力性さへ失はれた位に堅くなつたのです。(下・三十六)

「先生」にとつてこの告白は、例えば、柱にぶつかつて足元がふらつき眩暈から覚めた後のあの茫然とした気持を与えたに相違ない。

Kの告白を聞いた時、「先生」は「失策つた、先を越された。どうしやう……」という後悔とも苛立ちともつかぬ焦りが沸上がつてきて、Kに対して恐怖の念さえ感じる。

Kのお嬢さんを思う愛は真剣でひたむきであり、「先生」のお嬢さんを思う愛も真剣ではあるが、どこまでも自分を離れることはできなかつた。愛のみに没頭するには、あまりに知的で我の強い「先生」であつた。ところでKは昔から「精進」という言葉をたびたび口に出して言つていたし、彼もまたそれを遂行すべき努力を欠かさ

なかった。そこにKの偉大さがあり力強さがあつた。その点に於て「先生」はいつも「Kには適はない」と思い尊敬していた。Kはどこまでも性格が真面目で善良な人柄であつた。そして、「霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭つたりした」「難行苦行の人」に範を置いていた。そういう彼のことであるから、「先生」にとつてもお嬢さんのことをKに打ち明けるには、「学問の交際が基調を構成してゐる二人」(下・三十一)の意識からの脱出を計らなければならなかつたし、またそれだけの勇氣に欠けていた。「先生」の自意識の強さに加えて前述のことの為に、ついに「先生」の口からKに直接、素直なところをぶちまけることは出来なかつた。

Kの氣高い精神を日頃から知つている「先生」は、お嬢さんのためにKが「理想と現実の間に彷徨してふらふらしてゐるのを発見」(下・四十一)して、彼の弱みにつけ込むことをしきりに考える。

そしてついに、かつてKが房州で「先生」に向かつて口走つた『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』(下・三十)という言葉をKの目の前に浴びせかけた。そこには『策略で勝』(下・四十八)てた「先生」はあつても、いたわり労や道義心は微塵も感じられない。そればかりか「理想と現実」を彷徨うKをめつた打ちにしてしまう。何とかしてKをお嬢さんから離し、「理想」の方へ行かせようとする「先生」の必死の思いが、精神的に弱つているKの前に、無慘に吐き出されたのである。ここに至つては、かつて「先生」が叔父に欺かれたと同じくらしい打撃をKに与えたことになる。「先生」の内面に燃つていたものが、お嬢さんに向けられないでKに向かつて痛烈に爆発したといえよう。

さらに悲痛とまで思われる言葉をKに向つて「先生」は投掛ける

のである。それはKからお嬢さんのことを打明けられて数日経たある日「先生」とKは図書館を出て、龍岡町から池の端へ出て、上野の公園を入つたところで、突然Kは、先のお嬢さんの事について口を切つてきた。その場面において、「先生」は全く冷酷な態度を彼に示すのである。

「『もう其話は止めやう』と彼が云ひました。(中略)するとKは、『止めて呉れ』と今度は頼むやうに云ひ直しました。私は其時彼に向つて残酷な答を与へたのです。狼が隙を見て羊の咽喉笛へ食ひ付くやうに。

『止めて呉れつて、僕が云ひ出した事ぢやない、もともと君の方から持ち出した話ぢやないか。然し君が止めたければ、止めても可い、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止める丈の覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張を何うする積なのか』(下・四十二)

じつに、ここにみられる「先生」は人間とは思えない程、嫉妬に狂つて醜い面をさらけだしている。

Kの言う『覚悟』の意味を、御嬢さんに積極的に出ていくことと勘違いして、Kの告白が誰にも知られないで自分だけになされたのを「先生」は見取ると、機微を窺いつつ、一足先に奥さんに自分の意を述べ承諾を得た。

ここまでの運びは、いかにも知的な人らしく巧妙に素早く行なわれた。しかし悲劇はこれから起つてくるのである。そして、「先生」の苦悩もそれより始まつていく。Kが「先生」にお嬢さんのことを打明けた時からしばらくして、Kは奥さんの口から「先生」とお嬢さんが結婚することを聞く。「先生」が「進まうか止さうかと考へ

て、兎も角も翌日迄待たう」(下・四十八)と逡巡していた晩にKは自殺してしまつた。

以上のようにみてみると、「先生」の性格的な固執が目についてくる。自分に囚われてあれこれ思い迷っているうちに思わぬ「運命」が「先生」のもとに忍び込んで来る。それがまた「先生」の航路を大きく左右して宿命的なものになっていく。そしてますます迷路、窮地へと自分を追い込み幽閑していく。

ある時、「先生」がふと洩らした言葉の中に、「私は世の中で女というものをたつた一人しか知らない。妻以外は殆んど女として私に訴へないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかないと私に訴へてゐます。さういふ意味から云つて、我々は最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」(上・十)というのがある。

結果的には倫理上どうあつても、意に適つたお嬢さんとの結婚生活は「先生」にとつては当然、幸福「であるべき筈」であつた。しかし実際はKに纏わる不安が、妻の顔を見る度に蘇るのである。幸福「であるべき」妻との生活が、Kを結ぶ因縁以外の何物にも考えられない程「先生」を悩ませるのである。ますます「先生」は暗くなつていく。かつて叔父を含む人間一般に対して「愛想を尽かし」た「先生」は、さらに自分にも「愛想を尽かし」てしまつた。そうなつてしまつた「先生」は、もはや生きる屍と同等である。世の中に存在はしているが自己をその枠内に見出だすことのできぬ、世の中から遊離した人間となり、生きるための手段さえも、一番身近である妻にさえも融和しないままの状態で必死に自分を匿っているのだ。「先生」は「私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたつた一人住んでゐるやうな気のした事も能くありません」(下

・五十三)と寂しさに襲われる孤独感をひしひしと膚で感じ取つていた。それはまた、自己の内部性情からくるということも………
そして、

「私はKの死因を繰り返し繰り返し考へたのです。其当座は頭がただ恋の一字で支配されてゐた所為でもありませんが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段々落ち付いた気分分、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方がなくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑がひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めたからです。」(下・五十三)

というところからは、人間の「運命」、人の力ではどうすることも出来ない縹渺とした虚無感、「天」が与える荘嚴さがみられる。

「先生」はそれを冷然とした面持で受止めたに相違ない。

おわりに

以上のように本論では自我々という人間の第二次的な性分に着眼して先生々をとらえてみた。

この自我々のためにこれまで幾多の英雄と称せられる人々は天下を取り大成し、また反対にある者はこれがためにどれほど自滅の悲哀を嘗めてきたであらうか………

まさにそれは嵐に襲われて大海に漂うゴムボートのように浮沈の

様相を呈している。

〃先生〃はどこまでも頭でものを考える人であつて、感情でものが言える人ではなかった。〃先生〃の中にはいつも（自分）という城が築かれていて、他人がその石垣にでも足を入れようとすれば、たちまちのうちに撥付けられてしまうほどの風格を秘めた人でもあつた。

自分を愛し自分を大切にする者は最も人間らしい人間であるといえるだろう。しかし、その自分を愛する気持が強いあまりに自分を一步も外へ押出せなくなつて果して人間らしい人間となり得るであろうか……

〃先生〃はすでに死せる人として、この世に辛うじて息をとどめていたという感じである。それも、元はといへば前にも述べたように過去の異状なまでの二つの体験が〃先生〃の上に重くのしかかっていた為である。

それら二つの荷物を背にかかえて淋しくこの世を去つていった〃先生〃の残したものは……

明治という時代の風潮をまともを受けて忠実に生きたという男性の姿と、〃私〃に新しくひきつがれた生々しい事実とを除いて他に何が考えられたであらうか……

その意味では〃先生〃はまさに〃我〃に育ち〃我〃に生きた明治人の典型ともいえる。すじがね入りの人物であつたように思われてくるのである……